

はじめに

2011年3月11日、私たちは忘れられない災害を経験した。津波によって、日本のグラウンドゼロといっても過言ではないほど変わり果てた被災地の情景を目の当たりにした。地震から日が経つにつれて、少しずつ日常を取り戻していくなか、今でも私たちにとって深刻な問題がある。それは、「放射線」だ。

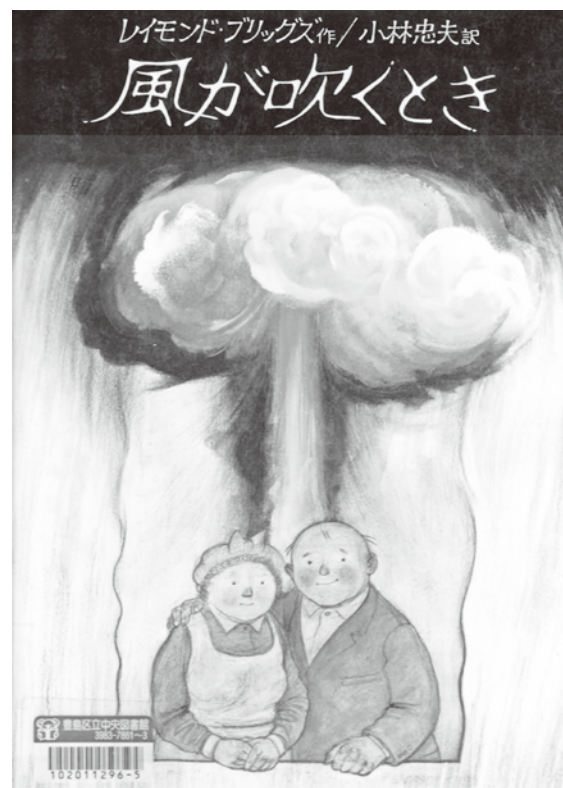
原子力発電所の爆発があつてから、私たちは真剣に向き合い始めたが、被災する以前に、しかも日本ではなくイギリスという異国の地で、「原子力」に警鐘を鳴らしていた人物がいたことをご存知だろうか。

その人物の名前は、レイモンド・ブリッグス。誰もがどこかで見たことがあるキャラクター、『スノーマン』の作者である。他にも、『さむが

やのサンタ』、『サンタの楽しい夏休み』など、親しみ易い児童絵本を作ってきた作家のレイモンドが放射能汚染の恐怖を絵本に表現した作品が、この文章のタイトルでもある『風が吹くとき』だ。

あらすじ

イギリスの田舎に暮らすジムとヒルダ夫妻は、定年を迎え、年金生活を送っている。平和な毎日には、ある日ラジオから聞こえてきた「当局ノ発表ニヨレバ、ワガ国ニ対シテ敵ノみさいる攻撃ガ開始サレマシタ」という臨時ニュースによって、崩れ始める。そう、この作



# 風が吹くとき 絵本からの警告

外国語学部  
英語英文学科4年

長瀬 絢香

品における「原子力」とは日本が唯一被爆を経験した「原爆」のことなのである。

夫婦はミサイル発射の前、政府と州議会がそれぞれ作成した戦時下を生き残るためのパンフ

どありました。週1回の昼会議を設けていたのでそこで共有はできましたが、もっと早くみんなに情報が回るように来年は工夫したいと思っています。

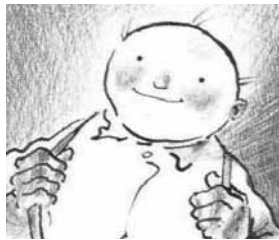
僕は今年の国際文化交流学科の文化ウィークは大成功したと思います。理由はいろいろな学生と先生方に参加していただいたからです。10月27日の「Festival de Lingvo（言語のお祭り）」は学生参加型のイベントでしたので参加した学生さんに加え、参加された方々の友人、家族も観に来てくださいました。それに加え、上位3つのチームを決めるのを当日来ていただいた先生方を選んでいただきました。このイベントはこれらの方々無しでは成り立ちませんでした。本当にありがとうございました。

来年もできれば同じような企画ができればいいと思っています。その時はいろいろな反省点を改善し、前年以上のいいものになりたいです。そして文化ウィークを通して、国際文化交流学科をより多くの人に知っていただけるといいと思います。

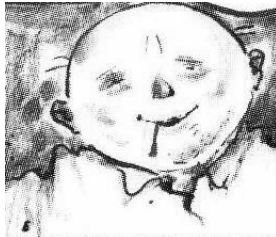


爆風に家が襲われる場面

原爆が爆発する場面の表現は、アニメーションよりも絵本の方が戦慄した。見開き2ページ全てを使って、シェルターに隠れたジムとヒルダが真っ白な閃光に包まれるのだ。彼らの姿を含め、背景全体がグニャリと曲がる。閃光が及ばない部分は真っ赤に燃える。アニメーションでも着弾のシーンは、ヒルダの回想を交えながら緩やかに表現されているが、それでも閃光は一瞬であった。静止画でここまで精神を疲弊させるものには出会ったことがない。徐々に曲がった風景は原型を取り戻してゆき、爆風が去ったことを表す。アニメーションには無かった場面が絵本には存在した。それは、ジムが衰弱におびえるヒルダを励ますために歌を歌うのだが、歌うジムの口からは血が流れる。次々と襲ってくる異変が、恐怖を逆なでしていた。



爆弾が落ちる前のジム



放射能の影響を受けたあとのジム



爆弾が落ちる前のヒルダ



放射能により髪の毛が抜けてしまったヒルダ

## 無知の恐怖

筆者がアニメーションと絵本という異なる表現方法で作品に触れたことで、共通のメッセージを発見した。それは、知らないということへの警告である。

ジムは、図書館へ行って戦争が起こりそうな事実を知る。そして戦争に備え、政府と州議会がそれぞれ別で作成したパンフレットに従い、シェルターを作るのだが、彼はそもそも、核兵器や放射能がどのようなものであるかを知らなかった。国や偉い人が作ったパンフレットに書いてない事項は気にする必要がないと判断したのである。2人の会話のなかで、「放射能なんて見えないわ」とヒルダが話す場面がある。見えないうち大した影響は出ていないのだからと、夫婦はシェルターから防護服といった何の備えもなしに出てきてしまう。国の上層部が教えてくれた自家製シェルターは、元々が放射能に耐える代物ではなく、仮にシェルターに留まっていたとしても、結果は同じなのだが……。

放射能の危険は無いと判断した2人は、今までと全く変わらない生活を再開する。のどが渇いたといってお茶にするのだが、ここで彼らは衝撃的な行動に出る。なんと、溜めた雨水を飲む

レットを基に、自家製の「核シェルター」を作る。着弾時の爆風からは生還するものの、その後の放射線によって、徐々に侵されていく。夫婦は最後まで国が自分たちのことを救助に来てくれると信じ続けるが、ついに最後までそれは叶わない。

## タイトルの意味

『風が吹くとき』の原題表記は When the Wind Blows で、これは、ハンプティ・ダンプティが出てくる童話、『マザー・グース』の一節からとったものである。

坊や、ねんねよ、樹のこずえ、  
風が吹いたら、揺りかごゆれる。  
枝が折れたら、揺りかご落ちる。  
坊やと、揺りかご、みな落ちる。

この部分には『マザー・グース』の中で注がついており、「この歌は思ひ上がった人々や、野心的な人達への戒めとなるでしょう。彼らは高い所へ登ってついにはたいていの人が落ちてしまふのですから」とある。作品の中で風は原爆の爆風を意味し、揺りかごとは地球のことを表しているのだ。この一節は、『風が吹くとき』の

DVDのパッケージにも記載されているため、タイトルに込められたメッセージ性の強さが伺える。

## 絵本とアニメーション

『風が吹くとき』の原作は絵本だが、それを基にしたアニメーションも作られた。ここでは、絵本と映画の比較を行い、両者が与える印象の違いについて考察しようと思う。

筆者がまずこの作品に触れたのは、アニメーションであった。原作に忠実な絵がもちろん動くのだが、アニメーションであるにも関わらず、どこか他人事には思えない気持ちにさせられる工夫がなされている。それは、ジムとヒルダが暮らす家の描写である。夫婦の姿はアニメーションで描かれているが、背景となる家の中はドールハウスのように実写の物が使用されている。

小道具を実写にすることによって、二次元に三次元の要素が入り、現実へのリアリティを感じさせるのだ。原爆が落ち、爆風に家が巻き込まれた後のシーンでは、ソファアのクッションは破れ、すすだらけになり、電話も溶けている。爆風による被害を三次元で見せ付けることで、ジムとヒルダの家具があたかも自分の家具であ

るかのように感じられ、恐怖を身近なものにさせる。

絵本と違い、動画で話が進むことによって、ジムとヒルダの衰弱が刻々と表現されていく。時間が経過していく度に、どんどん2人の顔色は異様に変色していき、足元もおぼつかなくなり、ついには寝たきりになってしまふ。この時間の経過は、アニメーションだからこそ表現できるものであろう。

アニメーションと絵本で一番異なるのは、声が吹き込まれることである。2人の会話が耳から入ってくることで、より感情移入がしやすくなり、ここでも、衰弱の経過をまざまざと知ることが出来る。

この文章を書くにあたり、原作に触れないわけにはいかないだろうと、筆者は絵本も鑑賞した。絵本で強く印象に残ったのは、現実ではありえないほどの誇張された描写である。アニメーションでは、ジムとヒルダの衰弱はリアリティを感じさせる描かれ方をしているが、絵本では、これでもかというくらい顔色がおかしい。人間の顔色に、緑が使われることはそうそうないだろう。頬がピンクに染まり血色が良かった2人が、最終的には真っ白な顔に緑のシミやクマといった変貌を遂げる。



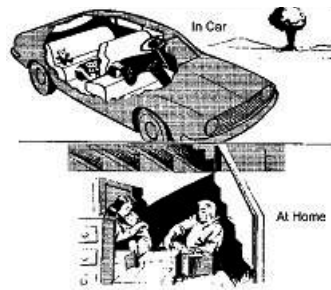
のだ。原爆が落ちた後の雨、それはつまり黒い雨だ。そんなものを身体に取り込んだらどうなるか、被爆を経験した世代でない私たちでも分かる。しかし2人は「雨水ほどきれいなものはないよ」と言う。

2人の態度が一貫しているのは、「国を信じて待つ」というところである。彼らは、どんなことが起きても、「そのうちに国の救助隊が駆けつけてくれる」と信じて疑わなかった。しかし、高濃度の放射能で汚染された土地にそう易々と人が立ち入れるはずもなく、全体の描写から想像するに、その地域に爆風で生き残ったのは、ジムとヒルダだけのようだ。熱で電話は溶け、もちろん地域一帯の連絡網など活動しない。それでも2人は、「もうすぐ新聞が来て状況が分かる」だの、「郵便は機能している」だのと理由をつけて、家でひたすらに救助を待つ。そうして、状況を知らなすぎる彼らは、悲しい最後に向かつて日々を消化していくのである。

ジムが従っていたパンフレットには、そもそも怪しい点しかなかった。ドアを外し壁に45度に立てかけるだけで、シェルターは完成するのだから。あとは、衝撃を吸収するためにソファのクッションを集めたり、非常食をシェルターの中に準備する。シェルターが作られた場所も、地下でも

戦時用パンフレットの中に、白いものを着るのが良いと書いてあったので、ジムは白いシャツをヒルダに用意させる。白い服は防護服のつもりだったが、用意させる理由は、がらの入った着物を着ていたヒロシマの人たちは、原爆が落ちたとき、そのがらのところだけ火傷をして、白いところはそれほどひどくなかったということだった。それに対し、ヒルダは「でも日本人でしょ」と言っている。ジムは理解できなかったようだが、日本人である私たちは、何となく予想ができるのではないだろうか。ヒルダが言いたかったのは、自分たちは白人で、黄色人種とは違うのだからそのようなことは起こらないという意味の言葉だったと思われる。ジムとヒルダは、戦時下にあっても過去の勝利した時の思い出しか語らず、目の前の出来事に向き合っているようである。うではなかった。全て国がどうにかしてくれる。他人事だったのである。自分には関係が無いと思っていた結果が、2人の結末だ。確かに、ジムとヒルダの物語は絵本とアニメーションの中の話であり、ドキュメンタリーではない。しかし、どうか他人事とは思わないで欲しい。放射能が注目されることになった地震も、誰が予想できたか。被災地の現状も、どこか他人事のように考えてはいないだろうか。『風が吹くとき』を読

なんでもなく、リビングだった。今では誰しもが信用しないような内容のパンフレットが、戦争の危機があつた当時には実際に配られていたらしいのだから驚きである。パンフレットの必要な物の中で最も謎めいており、不気味な結末へと繋がったのが、紙袋だ。ジムが読んでいたパンフレットによると、原爆が爆発する前に入るものなのだろうだが、一体どういう意味合いで用意させたのか。それは、ジムとヒルダが国を信じ続けながら力尽きたときに分かる。寝たきりで動けないほど衰弱した2人は、シェルターの中に戻ることにし、その時ヒルダはジムに「あなた、そろそろ紙袋に入った方が良いんじゃない？」と言う。もちろん、2人が使用するのは放射線から身を守るためだが、紙袋に入った後、2人は動かなくなった。そう。紙袋は、死体袋だったのだ。アニメーションの冒頭に、厳重に装備された隊列が、何かを運搬している様子が実写で写る。それがあの2人だったと思うと、ぞつとするものがあつた。



核シェルターの作り方

## 知ることの大切さ

私たちは、ジムとヒルダよりは、何らかの知識があるといえよう。しかし、自信を持って知っていると言えるだろうか。正しい知識とそうでない知識を見分けるだけの力が、本当に備わっているのだろうか。筆者は、そうではないと思っている。もし、全員がしっかりと判断でき、知識を共有していたとしたら、根も葉もない風評被害など起こるはずがないからである。放射能の恐ろしさを理解しているというのは、非常に大事なことだと思う。知っていれば、ジムとヒルダのように命を落とす行動を自ら取ることはいないのだから。しかし、怖さだけを知っていれば、それで良いのだろうか？汚染されたものを排除することが、果たして本当に正しい判断と言えるのか？それでは、原爆に巻き込まれる住民自らに死体袋を用意させた国と何も変わりはない。私たちが、表面的なことだけでなく、知ろうという姿勢をとることで、正しい情報を共有できれば、ジムとヒルダのような悲劇はもちろん、より多くの人の社会を守ることができるのではないだろうか。

ジムとヒルダも、物語の中で他人を蔑視していた。それは、あの「ヒロシマ」での出来事である。

んで、無知の恐怖を知り、自分たちに出来ること、情報とどのように向き合っていくかの考え方を新たにしてもらいたい。

## 参考文献

- 小林忠夫訳、『風が吹くとき』、あとがき  
画像：レイモンド・ブリッグス作、小林忠夫訳、  
『風が吹くとき』より
- <http://d.hatena.ne.jp/T-260G/20091201/1259648836>